

令和元年度 奈良県租税教育推進連絡協議会会長賞

「税の大切さ」

西大和学園高等学校 一年 田平 詩織

「消費税十パーセントなんて、高すぎるよ。」

わたしはずっとそう思っていた。今までは。

この作文を書くにあたって、わたしは税についてもっと知らなければと思った。そこで国税庁ホームページの税の学習コーナーを読んでみることにした。

ある日の朝、母が言った。

「昨日は昼間にごみ収集来たから、ゆっくりしてたのに、今日はもう来たの。まだごみまとめてないし。いつ来るかぐらい統一してほしいよ。」

以前、遠く離れた祖母の家に行く途中、高速道路で十キロメートル程の事故渋滞に遭った。そのときわたしはこう言った。

「パトカー来るの遅いな。交通整理してくれないと進まないよ。」

ある時、わたしが風邪をひいて病院に行ったとき、請求額を見て、思わずわたしは、

「けっこうするんだね。」

というと、母が教えてくれた。

「中学生までは医療費は無料よ。ここでは一旦お金を支払うけれど、後で町からその分のお金が支給されるから。」

始めの二つに関しては、ごみ収集車やパトカーが来ることが大前提として話されている。しかし、これらは全国から集まった税収で成立しているものである。もし税制度が無かったら、個人個人がお金を払わなければごみ収集車もパトカーも来てくれないだろうし、どれだけ子供が多くても、医療費を払わなければならないだろう。わたしたちが当たり前だと思っている生活を送るために、税は不可欠であることがよく分かった。

わたしは今、私立高校に通っている。小・中と公立の学校に通ってきたわたしにとってまず驚いたのは授業料の高さである。入学してしばらく経ったとき、4Kの薄型テレビが余裕で買えそうなくらいのお金が引き落とされていた。自分が入りたくて、ここに入ったわけだし、両親もお金のことはきにしないでいいと言ってくれるけれど、やっぱり申し訳ないという気持ちになる。

また、わたしはSSH（スーパーサイエンスハイスクール）に所属しており、こちらは文部科学省から、多額の資金が支給されている。歳入の半分以上を税収が占めているので、きっとこのお金も税金だろう。今まで国は人口の多い高齢者のことばかりにお金を費やしているイメージがあったが、わたしたちのこともこんなに支援してくれているのだと知って、もっと勉強を頑張らなければいけないと思った。

わたしたちは、バイトをすれば別だが、収入が無いので実際に税を納めてはいない。わたしたちが使っているお金は、みんな両親が働いて得たお金である。そんなわたしたちに

も多くの税金が使われているのだから、わたしが大人になったらきっと喜んで税を納める
だろう。それがわたしからの恩返しになると思うから。